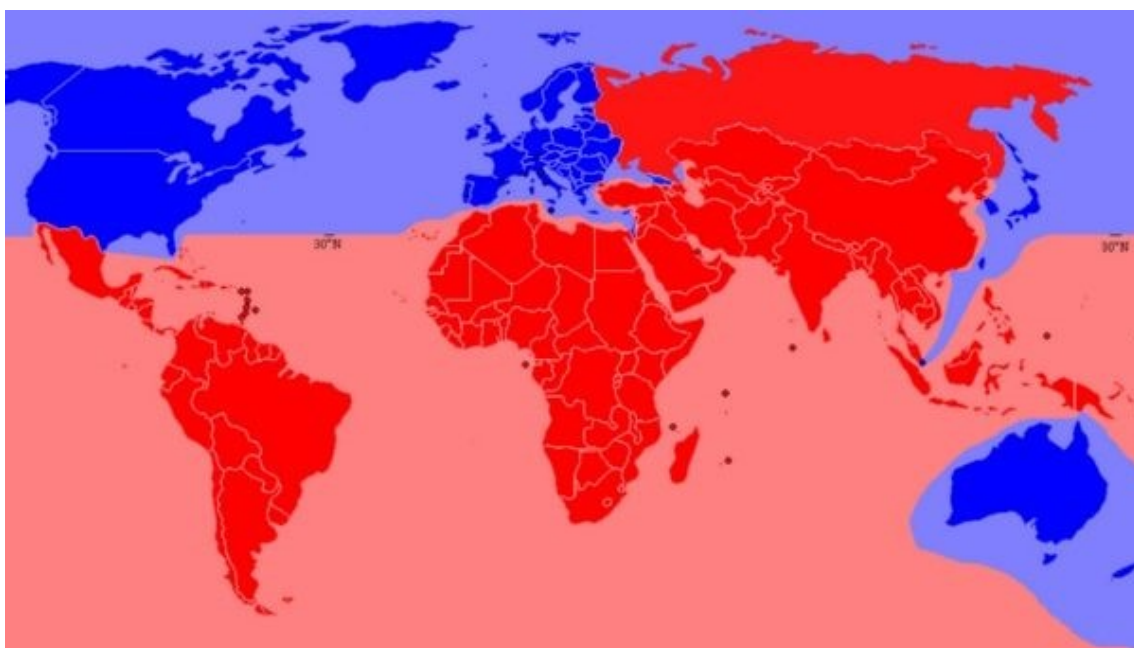


欧米と世界の多数派 - 抑圧 VS 開放

スティーブン・セフトン (Stephen Sefton) 記者

テレスル 2022 年 11 月 24 日

[The West and the Majority World - Repression Versus Openness | Opinion | teleSUR English](#)



2004年にフィデル・カストロとウゴ・チャベスが設立したALBA(米州ボリバル連合)には、ボリビア、キューバ、ニカラグア、ベネズエラ、そしてカリブ海のセントビンセント・グレナディーン、ドミニカ、セントキッツ・ネイビス、グレナダ、アンチグア・バーブーダ、サントルシアの島国が参加している。その設立の1年前の2003年には、中国、ロシア、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、ウズベキスタン、インド、パキスタン、イランからなる「上海協力機構(SCO)」が正式に発足している。

両組織は、連帯、メンバー間の平等、異なるイデオロギーの相互尊重という点で実質的に同じ原則を共有している。このことは、同時期に、世界の異なる極で、米国とその同盟国による経済的締め付けと新植民地主義的侵略から自由な世界

を構築するという共通の決定がなされたことを示唆している。

ALBA 諸国の指導者たちは、その発足以来、北米と欧州の帝国主義による残虐な搾取と支配、そして「望むどおりする」というギャング外交を糾弾してきた。ニカラグアのオルテガ大統領は今年 5 月、第 21 回 ALBA-TCP 首脳会議でこう宣言した。「彼らはモンロー・ドクトリンの実践をやめていないし、放棄もしていない。民主主義の名の下に、専制的で帝国主義的、テロリスト的な国際政策を強行している。帝国主義は変わっていない。帝国主義の本質、完全に犯罪的な本質が現存している」。

同じ会議で、ベネズエラのマドゥロ大統領は表明した。「何世紀にもわたる略奪と侵略、脅迫、帝国覇権主義はもうたくさんだ、今こそ我々の世紀だ。・・・そして我々、ラテンアメリカとカリブ海諸国の道は、ALBA、ラテンアメリカ・カリブ海諸国共同体 (CELAC) であり、これが我々の道だ。対等と相互尊重、包摂と統一集合の道だ」。

同じサミットで、キューバのディアスカネル大統領も、多様性の中の統一という ALBA 諸国の誓約をこう表明した。「排除と選択の企てに立ち向かって、ラテンアメリカとカリブ海諸国の本物のメカニズムを強化し、統合と協調の行動をとることが急務だ。私たちは共に、干渉や外圧なしに、主権と自決を効果的に守ることができるだろう...私たちは、分裂ではなく団結を、引き算ではなく貢献を、対立ではなく対話を、押しつけではなく尊重を呼びかける」。

米国と欧州連合 (EU) の側からの数十年にわたる攻撃的な挑発に応じて、ロシア連邦は今年 2 月、ついに自衛の行動をおこした。そして、9 月 30 日の歴史的な演説で、プーチン大統領は、ALBA や上海協力機構と同じ原則、真の協力、対等の尊重、多様性における統一、対話と国際法の遵守に基づく多極化世界のビジョンを精緻に説明した。ALBA 各国首脳ビジョンと、プーチン大統領が演説で表明したビジョンの類似性は非常に顕著である。

彼は、多極化する世界における多数派の人々の信念について語った。それは「主権を強化し、それゆえ、真の自由、歴史的展望、独立した、創造的な、本物の発

展への権利、調和のとれたプロセスを獲得するため」だ。プーチン大統領は、違いを克服し、共通の利益のために協力し、連帯の世界を創造する人間の能力に対する信頼でもあることを明らかにした。彼は、「私たちの価値観は、隣人愛、慈悲、思いやりである」と明言した。

ALBA 諸国、ロシア、中国、そしてその同盟国のこうした共通のビジョンと、欧米の実践との対比は、これ以上ないほど強いものだ。プーチン大統領が言うように、「西側諸国は何世紀にもわたって、他国に自由と民主主義をもたらすと言い続けてきたが、すべては反対だった。民主主義は抑圧と搾取になり、自由は奴隷と暴力になる。一極集中の世界秩序は、本質的に非民主的であり、自由を欠いたものである。根っからの偽りであり偽善者なのだ」。

米国とその同盟国に対するこの断固たる非難が真実であることは、帝国主義の起源から前世紀にわたる新植民地主義への進化までの植民地の歴史をみれば自明である。米国とヨーロッパでは、前世紀に普通選挙が導入されて以来、エリートが自国を民主主義国家に見せかけることができるようになった。彼らが実際にやったことは、自国民に社会経済的発展を保証するのと引き換えに、世界の多数派である（各地）の略奪に協力させることであり、それを可能にしてきた。アジア、アフリカ、ラテンアメリカの人民が、欧米諸国のこの繁栄と発展の代償を、何らかの形で今も支払っているのだ。

しかし、欧米のエリートたちが地政学的に力を持ち、多数を占める世界の資源を支配する範囲は、現在ではより限定的なものとなっている。このような欧米諸国の後退は、一部には、ユーラシア諸国が協力を発展させ商業・金融力を増大させている結果、生じている。同様に、中国とロシアおよびその同盟国による経済・外交活動の広がり、アフリカやラテンアメリカ・カリブ海諸国との関係、とりわけ主権の擁護に努める諸国・国民との関係を発展させている。

アメリカやヨーロッパの寡頭政治家の側では、世界的な力の相対的な低下に対する絶望的な反応が、3つの主要な形で表れている。第一に、国内において、労働力の搾取と反対派への弾圧が強められている。第二に、ロシアと中国、およびキューバ、ベネズエラ、ニカラグア、あるいはシリア、イラン、朝鮮民主共和国

といった地域の同盟国に対して、あらゆる種類の攻撃を一段と強めている。そして第三に、経済的な圧力に弱い国々に対して、さらに大きな威嚇と嫌がらせを加えて、引き続き従順さを保とうとしている。

北米とヨーロッパでは、1980年代以降の新自由主義政策によって、抑圧と経済的搾取が常態化した。米国では、社会保障制度と公共サービス全般への投資に対する政治的な攻撃が絶え間なく続いている。ヨーロッパでは、公共サービスは削減され、民営化されている。米国と欧州連合では、2008年から2009年にかけての金融危機の際にも、Covid-19対策による経済縮小に対応した金融対策の一環としても、企業エリートへの巨額の富の移転が行われている。欧米の労働報酬が実質的に低下していることはIMFでさえも認めている。欧米全体の労働条件も不安定になっている。米国では労働者のわずか10%が組合に組織されているに過ぎない。ヨーロッパ諸国では平均23%で、一般にはもっと低い。

この現実が何を意味するのか、簡潔にまとめることはできないが、しかし、欧米諸国における国内での経済的抑圧の強化や海外での侵略の増加に伴う主な影響として、ソーシャルネットワーク上での検閲やメディアにおける情報の抑圧、特に国際的な出来事に関する抑圧があげられる。これらによって、世界の多数派に対する西側の広範で激しい心理戦が強化され、主権と独立を守ろうとする諸国にたいする、米国とその同盟国による経済的・軍事的侵略とテロを容易にしている。

これはまさに西側エリートとその国民の側の道徳的・知的誠実さが深く、取り返しのつかない形で衰弱していることの現れであり、幅広い陰險な敗北主義の兆候である。他方、世界の多数を占める諸国の政府と人民の中には、国際的な場で主権的な権利を主張して国際関係に取り組み、国内と地域、そして国際的な発展のための新しい可能性を切り開こうとする人々が増えてきている。中国、ロシア、インド、ブラジル、南アフリカで結成されたいわゆるBRICS+に、イラン、アルジェリア、トルコ、アルゼンチン、エジプト、インドネシア、カザフスタン、ナイジェリア、アラブ首長国連邦、サウジアラビア、セネガル、タイ、さらにはニカラグアまでが賛同していることは、未来に対するこの信頼の最も大きな表れであろう。

セントビンセントおよびグレナディーン諸島のラルフ・ゴンザルベス首相は、今年7月19日、マナグアの革命広場でサンディニスタ革命43周年を記念して、次のような見解を述べている。「私は西半球の小さな国の出身ですが、小国は主権と独立の擁護、それに内政不干涉という2つの大きな原則を信頼し擁護しています。そうすることで我々自身を導き文明を前進させることができ、世界中のすべての人々と、友情を持って、しかし従属的にではなく、共に歩むことができます。その意味で、私たちはすべての人を友として、よりよい世界を目指しているのです」。この見解に世界の大多数の諸国が賛同していることは明らかだ。
(了)